



Maximize Presupposition and Biscuit Conditionals

Yoshie Yamamori

EasyChair preprints are intended for rapid dissemination of research results and are integrated with the rest of EasyChair.

April 9, 2022

前提の最大化と擬似条件文

1. はじめに

本研究の目的は、擬似条件文 (Biscuit conditionals) の生起の背後に働く語用論的メカニズムを前提(presupposition)の強弱という観点から明らかにすることである。

前提とは、ある文が適切に発話されるために満たされなければならない条件である。また、前提は、common ground によって含意されなければならないとされ、前提トリガー (presupposition triggers) は定性の条件 (definiteness conditions) を導入する部分関数としてモデル化されている (Heim, 1992)。従って、前提を含む文は当該文脈が当の前提を含意する場合に限り適切に使用される。しかし、文脈条件が同じであっても、前提トリガーによって使用可能性に違いが生じる場合がある。前提の最大化(Maximize Presupposition! : MP)は、定性の前提が含意される環境下で不定冠詞の使用が不適切になる現象を説明するために Heim(1991)によって導入された原則である。以後、様々な前提トリガーの(義務的)使用やふるまいを MP により説明する試みがなされており、MP を語彙レベルの前提トリガーに限定的に適用する試み(Percus, 2006)や、MP を文レベルの語用論的原則と捉え、量の公理(Grice, 1975)に組み入れられるとする主張(Schlenker, 2012; Singh, 2011)がなされている。前件の前提が後件に投射される条件文も、MP が文レベルの原則として捉えられるべき対象である。

本研究では、前件が後件の前提を提供しない関係にある擬似条件文について、前件と後件が<前提>を構成することにより、(規則的に生じる)“容認の含意”を<(推論)結果>として導出するという論理構造を持つことを示し、その背後にあるメカニズムを MP を用いて説明できることを主張する。具体的には、前件(条件節)における MP の充足が、前件と後件が前提を構成する動機/要因であることを提案する。

2. Maximize Presupposition!

Heim(1991)は、(1a,b)のコントラストが一般的な言語使用の原則から説明されることを提案した。

(1) Context: It is common ground that there is a unique sun.

- a. # A sun is shining.
- b. The sun is shining.

その原則が、前提の最大化(Maximize Presupposition! : MP)として知られる(2)の原則である。

(2) Maximize Presupposition! Make your contribution presuppose as much as possible.

以来、多くの研究者により、様々な前提トリガーが示す競合関係の形式的な側面を文脈条件と共にあぶり出し記述する作業が行われてきた。その成果を MP の標準的な定式化としてまとめたものが(3)である。

(3) MAXIMIZE PRESUPPOSITION! (MP) (Marty and Romoli, 2021)

A sentence ϕ is infelicitous in context c if there is an alternative ψ to ϕ such that:

- a. ψ 's presupposition asymmetrically entails ϕ 's presupposition, and
- b. ψ 's presupposition is satisfied in c , and
- c. ψ and ϕ are contextually equivalent in c .

(3)のポイントは、同じ使用文脈に生起し、同じ新情報を提供する文 ψ と文 ϕ があり、 ψ が ϕ より強い前提を伝えるとき、協調的話者は ψ の使用を強いられる、という点にある。これを用いて(1b)のコントラストを説明すると次のようになる：(1a)と(1b)は同じ情報を伝達するが、(1b)が関与的な文脈で満たされるより強い前提を伝えるという僅かな差に基づいて、MP から(1a)の不適切性が予測される。

3. 擬似条件文の論理構造

擬似条件文は、直説法条件文と同じ条件文の形式を持つが、(i)-(iii)のような違いがある：

(i) 直接法条件文では前件が後件の成立文脈を制限するが、擬似条件文では制限しない。

(4) 天気が良ければ、外で食事をする

(5) 空腹なら、サイドボードの上にビスケットがあるよ (→ ビスケットを食べてよい)

(ii)前者は後件命題が真であることを示唆しないが、後者は常に示唆する(Austin, 1956)。

(iii)後者は常に“容認の含意”(5)：食べてよいを伴立する。

(iv)後者の後件は話者に帰属する新情報である。

(空腹なら、 サイドボードの上にビスケットがある{よ/*ね})

擬似条件文について、Franke(2007)は、 p を c (=common ground) に付加して c を更新(update)することにより、 q を最適化する機能を持つという(6)の論理構造を提案している。

(6) $c + \text{"if } p, q\text{"} = (c \cap p \cap q) \cup (c \cap \sim p)$

C は会話参加者が互いに当然だと決めつけているような命題情報の集合である (Stalnaker, 1978) ので、p が談話参加者間の共有情報であるか否かが (6) の妥当性を左右する。英語では擬似条件文と直説法条件文に形式上の差がないため、日本語の条件文では「なら」だけが擬似条件文と共起する ((7)) という事実は重要である。

- (7) a. *空腹ならば、サイドボードの上にビスケットがあるよ
- b. * 空腹であったら、サイドボードの上にビスケットがあるよ
- c. * 空腹であると、サイドボードの上にビスケットがあるよ
- d. 空腹なら、 サイドボードの上にビスケットがある{よ/*ね}

「なら」は「話者の判断」を表すモーダルな意味を持つ (益岡, 1997)。従って、(6) のように、話者の信念に属する「なら」節命題 p を c に付加することはできない。

上記 (i) ~ (iii) の特徴を踏まえて擬似条件文の意味を考えると、(6) の代替案として、容認の含意を推論結果、後件 (「なら」節) を前件に追加された前提に修正した (8) の論理構造を導くことができる。

$$(8) \quad p \cap (c \cap q) \rightarrow r$$

Karttunen and Peters (1979) の文の右から左へと前提が投射される結合アプローチを仮定すると、(8) は、p が前提として文脈に導入されると、続いて ($p + q$) のように q が投射され、推論結果の r が導出された時点で投射が完結することを示している。しかし、p と共に q が前提を構成する理由/動機は何か、という点が問われなければならない。

4. Maximize Presupposition と擬似条件文

本研究では、MP を擬似条件文の分析に拡張することで、p と共に q が前提を構成する理由/動機の説明が可能になることを提案する。

Schlenker (2012) は、MP を文レベルの語用論的原則と捉え、量の公理 (Grice, 1975) に組み入れられる、とする。同じ文脈に帰属する同じ新情報を提供する 2 つの文があるとき、より強い前提を伝える文を使わなければならないという MP は、話者は会話の目的のために必要で十分な情報を提供しなければならない、という量の公理に通底するアイデアを持つ。

先述した通り、前提が適切なものであるためには、話者と聴者が共に真と認める命題から成る common ground (c) の一部でなければならない (Stalnaker, 1978)。従って、c に新たに付加される命題は談話参加者間で真であるとして共有されるものである必要がある。直接法条件文の前件は仮定的条件として c に付加される。しかし、モーダルな意味を持ち、仮定的条件として c に付加し得ない擬似条件文の前件が提供する前提は「弱い」前提でしか

い。量の公理を遵守すれば、協調的な話者は、ここで「容認の含意」を導くためにより「強い」前提を提供しなければならないことになる。前節の (ii) (iv)の通り、擬似条件文の後件命題は真である点において c の一部であり、かつ、相補分布的に対立する前提（命題）を排除する「強い」前提を提供する。擬似条件文の前件が前提として不十分であれば、協調的な話者が「容認の含意」という推論結果を得るために、「強い」前提としてこのような特性を持つ後件命題を用いることは、言語の処理の側面からも経済的な方略であると考えられる。

5. 結論

擬似条件文が(8)の論理構造を持つとして、そこで問題になるのが、後件命題が前提を構成する動機は何か、という点である。本研究では、この問への回答として、MP が動機のコアな部分を担っていること、つまり、擬似条件文の生起の背後に働く語用論的メカニズムに、MP-量の公理が関係していること、を提案した。擬似条件文では、前件命題の前提としての「弱さ」を回避するために、MP-量の公理に従い、常に真になる後件命題が「強い」前提として挿入される、ということである。

参照文献

- Austin, J. L. (1956) If and cans. *Proceedings of the British Academy* XLII:107-132.
- Heim, I. (1992) Presupposition projection and the semantics of attitude verbs. *Journal of Semantics*. 9: 183-221.
- Grice, P. (1975) Logic and conversation. Peter Cole & Jerry L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics*. 3: 41-58. Academic Press.
- Karttunen, L. and S. Peters. (1979) 《Conversational implicature》. Oh C.K. and D. Dinneen(eds.) *Syntax and Semantics*. 11. Academic Press.
- Percus, O. (2006) Anti-presuppositions. A. Ueyama (ed.) *Theoretical and empirical studies of reference and anaphora: Toward the establishment of generative grammar as an empirical science*: 52-73.
- Schlenker, P. (2012) Maximize Presupposition and Gricean reasoning. *Natural Language Semantics*. 20(4): 391-429.
- Singh, R. (2011) Maximize Presupposition! And local contexts. *Natural Language Semantics*. 19: 149-168.
- Stalnaker, D. (1978) Assertion. P. Cole (ed.) *Syntax and Semantics, Volume 9: Pragmatics*: 315-332. Academic Press.